

月刊 圓一フォーラム

EN-ICHI FORUM

2

2022 no.375

政策オピニオン 上智大学大学院地球環境学研究科教授 平尾桂子
持続可能な家族と社会を考える



父親の子育てと子どもの発達



愛知教育大学名誉教授 / 埼玉学園大学特任教授 博士(教育学) 尾形和男

令和4年4月1日から段階的に「改正育児・介護休業法」が施行され、父親の育児参加を効果的に推進する方向に移行している。

父親の子育ては子どもの発達にどのような影響をもたらすのだろうか。関連する研究は主に1970年代からアメリカにおいて行われ、Lamb⁽³⁾の父子間に形成される愛着関係形成に関する研究が有名である。父親の育児の「質」「内容」により母親と変わらない愛着関係が形成され、子どものパーソナリティ、社会性、感情などに大きな影響をもたらすことが報告された。愛着関係について Bowlby⁽²⁾は、養育者との関わりの中から子どもは「自分は他者から愛され、援助を得るに値するか」「他者は信頼できるか」という自己と他者についての心的表象(イメージ)を形成して行くとしている(このメカニズムはIWM「内的作業モデル」と呼ばれる)。IWMには生後6ヵ月〜5歳頃の親の養育行動が特に大きく影響し、後の友人関係、恋愛関係、自分が親になった際の親子関係などをはじめとする対人関係に活用されるとしている。その後、Bartholomew⁽¹⁾は自己と他者の高低の軸から4種類の行動傾向を指摘した。それは、自己と他者の両感覚が共に高い場合、自己への信頼感が高く自律性と他者との親密な関係のバランスが取れるが、両感覚共に低い場合は自己への不信感が強く親密な関係を回避するという行動傾向などを指す。

また、夫婦で作る養育環境も重要である。このこと

に関して父親が家庭関与を多く行う家庭では、小学校低学年児童の共感能力が有意に高くなることが指摘されている。これは家庭内の相談ごとの調整、また夫婦間の意見の食い違いに相互に意見調整を図る様子など、子どもにとって人の気持ちを理解する学習の場となると考えられる。さらに幼児・児童の子育てにおいて、父親が子どもや家族とのコミュニケーションを多く取り、母親が妻あるいは母親としての役割達成意識を持つ場合は子どもの自己統制能力が有意に高いことも指摘されている。そして、小学校低学年児童では父親が家族とのコミュニケーション、子どもとの関わり、家事への援助を多く行いそのため母親のストレスが低い家庭は、父親の家庭関与が低く母親のストレスが高い家庭の子どもよりも社会性の発達(コミュニケーション能力・集団参加能力・自己統制能力など)が有意に高いことなども確認されている⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

以上のように、先行研究では父親が直接的あるいは間接的に子どもの精神的機能の発達に強い影響をもたらすことが一貫して示されている。今まさに、父親の子育てを中心とする家庭関与のもたらす意味と父親の重要性を改めて認識する必要がある。

参考文献

- (1) Bartholomew, K. 1990. Avoidance of intimacy: An attachment perspective. *Journal of Social and Personal Relationships*, 7, 147-178.
- (2) Bowlby, J. 1973. *Attachment and loss: Vol.2 Separation*. New York: Basic Books.
- (3) Lamb, M.E. 1976. *The role of the Father in child development*. New York: Wiley.
- (4) 尾形和男編著 2006 家族の関わりから考える生涯発達心理学 北大路書房
- (5) 尾形和男編著 2011 父親の心理学 北大路書房